

後藤健二さんの本を読んでみませんか？

眞鍋由比

現在、神戸市立図書館で40件から80件の予約が入っている人気の著者後藤健二さん。本校図書館にもあります。『もしも学校に行けたら アフガニスタンの少女・マリyamの物語』汐文社2009です。アフガニスタンの一家の生活が描かれています。一家の生活費を稼いでいた一番上のお兄さん（22歳）が爆撃で亡くなり、15歳のお兄さんが働かないと食べていけない。10歳のマリyamは学校に行ったことがない（お母さんもない）。戦争が終わってやっと学校に入学できると言われたのに教科書も文房具も支給が足りない。それでも希望をもって学校に行ったのにもう来ないでいいと言われ、がっかりして自分でノートに自習するのです。勉強どころか食べ物もままならない生活。戦争の跡が村のあちこちに残る悲惨な暮らし。

同時期に読んだジョン・ファインスタイン『ラスト・ショット』評論社2010とは対照的。こちらはフィクション。アメリカの13歳の少年がバスケットボールの記事コンテストで優勝し、大学バスケ大会のゲストジャーナリストとして招待されます。今まで憧れていたスポーツジャーナリストの世界に胸をふくらませ、同時受賞した女の子に負けるもんかと思いつつも惹かれたり。スター選手に近づこうとしたとき、思わず八百長試合を持ちかけられて脅されている現場に出くわし、彼を救うためホテルのセキュリティをだましたり、危ない目にあいつつもなんとか最後の試合にこぎつける話。ミステリーとしてもよくできているし（信頼している味方が一番怪しかったり、思わぬ味方が出てきたり）、スピーディな進展内容はわくわくさせられる（実際人気もあってこの主人公であと3作出版されているそうです）。

フィクションとノンフィクションを比べるのはあまり意味がないかもしれませんが、アメリカの10代の少年と、アフガニスタンの10代の少女の違いはこんなにも大きい。女の子が勉強に行くだけで学校を爆破されたりするような場所で生きていくのはどれほどたいへんだろう？生命や餓えの恐れがない場所で勉強ができる幸せに気づいてほしいと思いました。

後藤健二さんは停戦したカブールの人たちの暮らしを調べるために、かなり苦労し、それもこの本には書かれています。武装グループがはびこる村を通らないとアフガニスタンにいけない。そこは前日に外国人ジャーナリスト（イタリア人、オーストラリア人、スペイン人ほか）が襲撃され殺されたルートで、アフガン人ドライバーすら行きたがらない。けれど昨日襲撃があったのだったら今日は武装グループも用心するはずだから、むしろ今日行くべきだ、とかなり無茶を言って説得し、現地の人に怪しまれないように細心の注意を払いながら、後藤さんは危険地域を突破するのです。

紛争地域の子どもに寄り添う取材をしていた後藤さん。イスラム国の人質になって殺害されてしまったのが残念でなりません。どうか彼の気持ちを生かして、これ以上紛争地域が広がらないように、心を砕いていきたいと思いました。さて、日本の私たちになにができるでしょうか。

